

戦後80年 昭和百年

[戦後80年 昭和百年]食の思い出<下>

おやつ多様化 豊かさ映す

サツマイモから「夢の」市販品へ

戦中、終戦直後は食事にも困る状況で、家庭では無縁だったおやつ。高度経済成長期以降、徐々に豊かになり、多様化していく。姉が作ってくれたシュークリームやプリンなどの思い出を語る高井さん



■洋菓子に感激

名古屋市の高井克明さん(72)は岐阜県の実家が農家で、作っていた野菜などを食べ、買うのはサンマくらい。「子どもの頃のおやつはもっぱらサツマイモでした」。中学生になった1960年代中頃、姉が栄養士になるために短大へ進学し、月1回ほど家で料理の練習をするようになり、様々な料理を知った。洋食はもちろん、プリンやシュークリームなどの洋菓子も多かった。「初めて食べたシュークリームは生クリームがいっぱいでおいしかった。テレビに出てくるような世界が急に自宅にやってきたようだった」と振り返る。オーブンやお菓子用の型などはなかったので、学校から借りてきたりして作っていたという。

高校生になると、食べ物は買って食べることも増えた。「姉が作っていた料理は本格的だったようで、同じような味に出会ったのは社会人になって専門店ができてからだった」と笑う。シュークリームは冷蔵設備が発達する50年代後半以降に販売され、プリンが家庭で作られるようになったのはプリンのもとが販売された60年代からだ。

奈良県大和高田市の岡本由子さん(73)も和歌山県の実家は農家で、小学生の頃の食事は、作っていた野菜を中心だった。低学年だった50年代終わり頃に母が作ってくれたカステラに今でも思いをはせる。卵や小麦粉、砂糖などを合わせた生地を当時、婦人会で聞きつけて用意した無水調理鍋に注ぎ、弱火でじっくりと焼き上げたもの。「今思えばスポンジケーキだったかもしれない。ふわふわしてとてもおいしかった」と話す。その後、色々な洋菓子が食べられるようになってもカステラの味が忘れられないという。

■駄菓子屋

1964年頃の駄菓子屋さんをイメージした「ぎふ屋」の店内。瓶を模した容器に入れて販売するなど昔ながらの雰囲気がある(東京都中野区で)

福岡県久留米市の川島あやみさん(66)は、駄菓子が好きだった。60年代半ばの小学生の頃、未舗装の道を近所の友達と遊びながら歩いて駄菓子屋さんに向かった。チロルチョコやベビーラーメン(後のベビースターラーメン)などよく知られたもののほか、樹脂製の細長い容器に入ったジュースを凍らせた「氷ジュース」が思い出の味だ。

「当時は50円もあれば十分買えた。今、駄菓子売り場を見ると値段の高さに驚くが、懐かしさからつい手にとってしまいます」。駄菓子屋さんは戦争で一時消えたが、戦後復活し、50年代から60年代にかけて全盛期を迎えた。

■ポン菓子、果物

北九州市の永井とも子さん(76)の思い出は、米を膨らませた香ばしい「ポン菓子」。50年代半ば、業者が小型の三輪トラックに専用の製造機をのせて来ると、子どもたちが米と加工費を持って集まつた。熱して圧力をかけ、蒸気圧で爆発すると、「ぽーん」という大きな音とともに、膨らんだ米が飛び出してくる。新聞紙に包んでもらい、持ち帰る際、ぽかぽかと温かかったのを覚えている。

「当時、お菓子といえば、大きな瓶に入ったものを自分で取り出して買う駄菓子か、紙芝居を見る時に買う水あめくらい。年に数回のポン菓子はとてもうれしかった」と話す。ポン菓子は国産の製造機の開発とともに、戦後広がった。現在親しまれている果物も食卓に並ぶようになった。

千葉県の英良人さん(74)がメロンやバナナを初めて食べたのは、50年代終わり頃の小学2、3年の時。当時住んでいた埼玉県から東京都内の親戚宅に遊びに行った時に出してくれた。バナナは八百屋さんに貼ってあった写真でしか見たことがなかった。

当時、バナナの輸入は制限され、60年代に自由化された。メロンは戦前からあったが、戦後、栽培が本格化した。「おやつといえばサツマイモをふかしたもののが中心で、たまに駄菓子屋さんに行く程度。まさに夢のようでした」と笑う。60年代以降、スナック菓子が量産化されるなど市販のお菓子が増え、洋菓子も多様化していく。(おわり。加藤亮、野口季瑛が担当しました)

(令和7年12月29日(月)読売新聞から一部抜粋)